

# 総論

—青年と民俗学の時代—

Introduction: Young Men and Folklore Studies during the Prewar Showa Period

丸山 泰明

MARUYAMA Yasuaki

## 要 旨

神奈川県国際常民文化研究機構共同研究（奨励）として2017年度から2018年度にわたって実施した「昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究」の総論として、共同研究および本書の概要について説明する。

共同研究では先行研究をふまえ、第1に民俗学関連の刊行物の出版や郷土舞踊の民謡の会、大日本聯合青年団郷土資料陳列所などの事業を関連づけ俯瞰的な視点から全体像を捉えること、第2に柳田国男だけではなく他の知識人の関わりにも目を向けること、第3に民俗学を受容し参加していく地方の青年団や青年たちの実像を捉えていくことを目指した。

日本青年館と大日本聯合青年団は、地域の青年団が連携するために生まれた中央機関である。また、日本青年館は、1920年代に新しく誕生したモダンな公園である明治神宮外苑に隣接し、地方の農山漁村の文物の展示、郷土芸能の上演、民俗学の講習会・研究会の開催が行われる画期的な文化施設であった。加えて、日本青年館・大日本聯合青年団は、新聞・雑誌・図書などを積極的に活用するメディア戦略をとっており、出版メディアによって青年に民俗学が普及していった。田沢義鋪や柳田国男の思想を背景として、青年たちが学ぶことを期待された民俗学は、目の前の実際の社会生活に向き合う実践的な学問であり、地方の青年の中には積極的に参画していく者もいた。しかし日中戦争勃発による社会情勢の変化により、1937年を最後に民俗学に関する事業は終焉を迎える。

共同研究の成果は、共同研究員の論文をまとめた論考篇と、青年と民俗学に関する資料をまとめた資料篇により構成している。今後の課題として、第1に青年と「芸術」の関係、第2に植民地の青年団の関わり、第3に民俗学に影響を受けた青年の実像を検討することがあげられる。昭和戦前期の青年と民俗学の関係を明らかにすることは、現代において青年が民俗学を学ぶ意味を問うことにもつながっていくのである。

【キーワード】 民俗学、日本青年館、大日本聯合青年団、田沢義鋪、柳田国男

## 1. はじめに

本書は、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究（奨励）として2017年度から2018年度の2年間にわたって実施した「昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究」の研究成果報告である。

共同研究名にある「青年層」とは、単に当該の時代における若い年齢層の男性のことを指すわけではない。日本各地に存在した社会組織である青年団の男性たちのことである。青年団とは日露戦争後に町村などの自治体を単位としてつくられた若者の男性の団体である。従来、地域の村落には若連中や若い衆などと呼ばれる若者組が存在した。若者組は、その性格が地域によってやや異なるものの、地域の会員としての知識や技能を身につけるための教育、人足などの労働、祭りや年中行事の運営、消防や夜警、婚姻や夜這いなどの性についての支援・規制などを担っていた。明治後期に青年団へと再編され、青年の修養機関および軍人支援や図書館などの自治体に関する事業を行う機関としての性格を強めていき、性に関する事柄は排除されていくようになる。若者組に加入する年齢は15歳が多かったが、1915（大正4）年9月15日に内務次官・文部次官によって発せられた通牒「青年団体ニ関スル件」では、義務教育を終えた者あるいは同等年齢以上の者として最高年齢は20歳を常例と定めている〔熊谷 1942 200-201〕。さらに1920（大正9）年1月16日に内務次官・文部次官によって発せられた通牒「青年団体ノ内容整理並実質改善方」では、実情により最高年齢を25歳に引き上げることを認めている〔同前 204〕。実際のところ、最高年齢は20歳、25歳、30歳などと地域ごとに異なったようだ。

これらの青年団の全国的な中央機関が、日本青年館および大日本聯合青年団である。二つの組織は、昭和戦前期に1920年代から1930年代後期にかけて、民俗学に関する事業に取り組んでいた。なお本論では、民俗学を幅広く捉え、郷土研究や郷土調査・郷土教育・郷土芸能・郷土工芸などの郷土に関する知と実践を含めて用いている。

どのような事業が行われていたのかについて、あらかじめ概要を紹介しておくことにしたい。

民俗学に関する事業の始まりは、1925（大正14）年10月26日の日本青年館の開館式の際に、「郷土舞踊と民謡の会」が三日間にわたって行われたことである。出演者を全国から募ったところ、70種の応募があったため、柳田国男、高野辰之、小寺融吉の3人が選択し、川越の獅子舞や岩手県の牛追い唄などの8種を上演した。その後も途中2回の中止を含みながらも合わせて1936年（昭和11）まで10回開催された。

1934（昭和9）年11月には日本最初期の民俗博物館である大日本聯合青年団郷土資料陳列所が日本青年館の館内に開所している。大日本聯合青年団郷土資料陳列所が展示する郷土資料は、職員が収集するとともに全国の青年から寄贈された。郷土資料の多くが、今日の民俗学では民具と呼ばれるものである。

1935（昭和10）年には柳田国男の還暦を記念して日本民俗学講習会が日本青年館を会場として開催されている。この会合をきっかけとして全国の民俗学の研究者を結びつける「民間伝承の会」が発足し、戦後「日本民俗学会」と改称して民俗学に関する中心的な学術団体となっている。このことは日本の民俗学史を語る上で、大きな転機となった出来事として必ずふれられるものである。また、日本民俗学講習会が開催された1935年に出版された民俗学の研究方法のテキストである『郷土生活の研究法』の編集には、日本青年館の職員であり村落社会学会の職員であった小林正熊と野口孝徳が関わっていた。

このように活発に民俗学に関する事業を行っていたのだが、1937（昭和12）年を最後に、ほとん

どすべての事業を取りやめてしまう。そして戦後、日本青年館で開催される全国民俗芸能大会だけが復活して、今日に至っている。

なぜ昭和戦前期に、青年のための学問として民俗学は必要とされ、日本青年館や大日本聯合青年団は民俗学の普及に取り組んだのだろうか。これらの事業には、どのような知識人がどのように関わったのか。そして全国の青年たちは民俗学という学問をどのように受け止め、郷土についての研究や郷土の生活・生業の改善に活用していったのだろうか。さらには、なぜ急速に途絶えてしまったのだろうか。

共同研究の問題設定は、日本の民俗学の知られざる一面に光をあてようとする学史研究への貢献にとどまろうとするものではない。昭和戦前期という時代において、民俗学は青年にとってどのような意味を持っていたのかを問おうとしている。言い換えるならば、共同研究は、民俗学史のみではなく文化史や社会史の観点からも、青年と民俗学の関係を問おうとするものである。

共同研究の成果は論考篇に収録した共同研究員の方々の各論文と資料篇の各資料にまとめられている。本稿では、本書全体の総論として、共同研究全体の先行研究、日本青年館および大日本聯合青年団の概要と特徴、青年団運動において民俗学が重視された思想的背景・経緯・意義、共同研究全体の成果と課題について述べることにしたい。

## 2. 先行研究

民俗学の観点からの青年団についての研究は少なくない。これらの研究では、若者組の近代を論じる過程において青年団について言及されてきた。代表的なものとして、平山和彦 [平山 1988]、岩田重則 [岩田 1996]、中野泰 [中野 2005] などの研究をあげることができる。そこでは、従来の在地の若者組が日露戦争後に国家の指導のもとに青年団として再編成されていき、国民(臣民)の教化機関として位置づけられ、従来の若者組が担ってきた機能が国家によって解体・縮小していった過程が記述されてきた。このように、従来の民俗学において青年団とは、前近代の習慣とされる「民俗」を廃れさせたものとして捉えられてきた。

一方で、地方の青年たちにとっての中央機関である日本青年館や大日本聯合青年団が1920~30年代の民俗学の形成において契機となる役割を果たしたことは、民俗学史の一コマとしては知られていたものの、その理由や背景・実情については、いくつかの先駆的な研究を除けばなく、十分な研究がなされているとは言いがたい。

日本青年館と民俗学の関わりについては、これまで主に3つの点から研究がなされてきた。第1は柳田国男と日本青年館の関係、第2は日本青年館を会場にして開催されてきた郷土舞踊と民謡の会、第3は、日本青年館の中にあつた大日本聯合青年団郷土資料陳列所についてである。

まず第1の柳田国男と日本青年館の関係についてである。柳田国男と日本青年館の関わりについて、初めて本格的に論じたのが掛谷昇治である [掛谷 1996]。郷土舞踊と民謡の会の経緯や、日本青年館の幹部であつた熊谷辰治郎を幹事とする村落社会学会に柳田が深く関わっていたことを文献を幅広く渉猟することを通じて明らかにした。また大日本聯合青年団郷土資料陳列所についても構想から開設、閉鎖に至るまでの経緯を簡潔にまとめている。その上で柳田が1941(昭和16)年に朝日賞を受賞した際の、「昭和3年の『青年と学問』の刊行は象徴的に言えば多数の若者たちの胸の中に広く学問の種を投げかけていく行為」だったとする言葉を引きながら、この構想はそのまま日本青年館と大日本聯合青年団にも当てはまるものだったと結論で述べている [同前 1996 50]。共同研究は、有り体にいってしまえば、掛谷の研究を引継ぎ発展させたものであるともいえ

よう。ただし、問題設定上仕方がないことではあるが、軸となるのは柳田国男と日本青年館の関係であり、他の研究者などの知識人の関わりについての言及は弱い。また、掛谷自身が「田沢（義輔一引用者補）や柳田の青年団に与えた影響は今後多くの議論を待つところである」[同前]と指摘しているように、青年たちがどのように反応したのかが研究課題として残されている。

次に第2の郷土舞踊と民謡の会について取り上げることにしたい。郷土舞踊と民謡の会について批判的な研究の先鞭をつけたのが笹原亮二である[笹原 1992]。笹原は、郷土舞踊と民謡の会が開催された背景として、「全国的に農村の荒廃が進行し、その立て直しを図る」中で「農村を魅力のあるところへすべく娯楽の充実が叫ばれ、盆踊りなどの芸能の活用が論議を呼んでいたことから各種の芸能も風俗習慣とともに郷土研究の資料として注目されていた」のであり、郷土舞踊と民謡の会は「青年団による郷土復興のための運動という政治的意味を帯びていた」ことを鋭く指摘している[同前 48-49]。

笹原以降、郷土舞踊と民謡の会については、数多くの論考が発表されてきた。これらの論考では、地域の祭りや行事の際に演じられていた芸能が地域から切り離され、舞台上で観客を前に演じられることによって変容していくステージ化やイベント化が中心的な問いとして展開していった。もちろんこれらの論考も学術的意義は大いにあるものだが、共同研究の問題関心に即している、日本青年館はただの会場としてだけ扱われているに過ぎない。なぜ青年のための組織や施設で郷土芸能が催されたのかという問いは後ろへ退いていったのである。

第3の大日本聯合青年団郷土資料陳列所に視点を移すことにしよう。大日本聯合青年団郷土資料陳列所については、多仁照廣[多仁 1989]や森本いずみ[森本 1996]、そして先にも取り上げた掛谷昇治[掛谷 1996]の研究がある。これらの研究を踏まえつつ、筆者自身もかつて取り組み、民俗学者の渋沢敬三や、民家研究者の今和次郎と竹内芳太郎・蔵田周忠、日本青年館の嘱託職員だった大西伍一などの関わりあいを中心にして、資料の収集の過程、展示内容について検討した[丸山 2013]。しかしながら、共同研究を終えた今、拙著を改めて振り返ってみると、民俗学的な資料を収集・展示・研究するという今日の民俗に関する博物館のあり方を前提とする、視野の狭い観点から捉えてしまっており、大日本聯合青年団郷土資料陳列所が内包していた豊かな可能性を捨ててしまっていたことに気づかされる。大日本聯合青年団郷土資料陳列所の活動は、同時期に行われていた一人一研究や青年創作副産品展覧会とも連動し、新しい生活道具や工芸品を創作し生活の更生や産業振興に役立てていく志向も持ち合わせていたのである。

以上の先行研究の成果を踏まえつつ、共同研究が目指したのは、次の点である。第1に、民俗学関連の刊行物の出版や、郷土舞踊と民謡の会、大日本聯合青年団郷土資料陳列所などについてその実態を掘り下げるとともに、各個を別々に取り上げるのではなく、同時期に行われていた事業として関連づけ俯瞰的な視点から全体像を捉えること。第2は、従来の研究では柳田国男の関わりに偏りがちであったが、柳田だけではなく他に知識人の関わりにも目を向けること。第3は、民俗学を受容し参加していく地方の青年団や青年たちにもできるだけ目を向けてその実像を捉えていくことである。

### 3. 日本青年館・大日本聯合青年団の社会史——組織・空間・出版メディア

そもそも日本青年館および大日本聯合青年団とは、昭和戦前期の日本においていかなる存在だったのだろうか。この点について、①青年団に関する組織、②明治神宮外苑に隣接して立地する日本青年館の空間的特徴、③各種の出版物を刊行する出版メディアの3点について見ていくことにしよう。

日本青年館設立のきっかけとなったのは、明治神宮の造営に全国の青年団員が奉仕したことである。1912（明治45）年7月30日に明治天皇が崩御した後に、明治神宮を創建することになるが、労働力が不足していた。そこで全国の青年団が造営を手伝う。青年団員の奉仕に対し、1920（大正9）年11月22日に大正天皇は全国各都市の青年の代表を高輪御所にて引見し、「国運進展ノ基礎ハ青年ノ修養ニ須ツコト多シ諸子能ク内外ノ情勢ニ顧ミ恒ニ其ノ本分ヲ尽シ奮励協力以テ所期ノ目的ヲ達成スルニ勗メムコトヲ望ム」との令旨を与えた。これを記念するために、青年館建設の義が起る。1921（大正10）年9月2日には財団法人日本青年館が設立され、初代理事長には近衛文麿が就任した。財団法人日本青年館は、建物としての日本青年館の建設・維持・管理を行い、あわせて全国の青年団の発達を助けることを目的とした。また、財団法人日本青年館は、それまで青年団の中央機関だった青年団中央部の事業を引き継いだ。1925（大正14）年には東京の明治神宮外苑に隣接する土地に、全国の青年団の募金によって日本青年館の建物が竣工している。建物が竣工した1925（大正14）年には、大日本聯合青年団が設立された。大日本聯合青年団は、各地の青年団を束ねる道府県ごとの聯合青年団のさらに上位に位置する、全国の青年団の連合体を結びつける中央機関である。1927（昭和2）年には、日本青年館から教育に関する事業が大日本聯合青年団に移管された。大日本聯合青年団の理事長は日本青年館の理事長をもって充てられ、また理事の半数も日本青年館の理事から理事長が委嘱しており、日本青年館と大日本聯合青年団は不可分の関係にあった。

1929（昭和4）年3月に大日本聯合青年団は青年団の信条を定める「青年団綱領」を制定している。これは大日本聯合青年団の綱領ではなく、また地方の青年団に強制するものでもなかった。地方の青年団が独自の綱領を持つことを認めた上で、このような目的を持つことを希望するものであった〔熊谷 233-235〕。その内容は下記の通りである。

- 一、我等ハ純真ナリ 青年ノ友情ト愛郷ノ精神ニヨリテ団結ス
- 二、我等ハ若シ 心身ヲ修練シ勤勞ヲ樂ミ自主創造ノ人タルヲ期ス
- 三、我等ハ希望ニ燃ユ 清新ノ意氣ヲ以テ愛ト正義ノ為ニ奮闘ス
- 四、我等ハ国家ヲ愛ス 忠孝ノ本義ヲ体シ献身奉公国運ノ進展ニ尽ス
- 五、我等ノ心ハ広シ 人道ノ大義ニ則リ世界ノ平和ト人類ノ共榮ニ努ム〔熊谷 附録 165〕

「青年団綱領」では、「我等」と青年を主語にして、「純真ナリ」「若シ」「希望ニ燃ユ」「国家愛ス」「心ハ広シ」と青年の信条を屈託のない真っ直ぐさで表明している。人によっては、特に「四、我等ハ国家ヲ愛ス 忠孝ノ本義ヲ体シ献身奉公国運ノ進展ニ尽ス」を取り上げて、愛国心と忠孝の精神により青年を国家へと動員していく国家主義を嗅ぎとり、強い批判を加えるかもしれない。そのような批判も間違いではないだろう。しかし筆者は、その他の文言に着目したい。「友情ト愛郷」「自主創造」「清新ノ意氣」「愛ト正義」「人道ノ大義」「世界ノ平和ト人類ノ共榮」といった言葉は、理想を信じ、新しい文化や社会を生み出そうとする潑刺さを感じさせるものである。あまりにも理想主義的に過ぎると現実主義の立場から冷笑することもできるだろうが、理想を高く掲げる組織であったことをここでは確認しておきたい。なぜならば、1930年代終わりにこの理想は、まったく別のものへと取って代わられるからだ。

共同研究では、昭和戦前期に日本青年館および大日本聯合青年団が取り組んでいた事業として民俗学に関するものだけを取り上げているが、いうまでもなく他にも各種の事業を行っている。経済を活性化し暮らしを良くしていく農山漁村の更生に積極的に取り組んでいる。また、1925（大正14）年に普通選挙法が制定されたことを受けて、政治と選挙に対する知識を与える活動も行ってい

た。加えて、生産と労働、社会と政治の課題の他にも、陸上競技をはじめとするスポーツ、自然に親しむ登山・ハイキングやワンダーフォーゲル運動、演劇の創作と上演といった娯楽についても盛んに啓発していた。若い青年たちが社会に向き合い、快活に楽しく暮らすことを支援していたのであり、そのなかに民俗学に関する事業も存在したのである。

### 空間的特徴

日本青年館は組織であるとともに建物であり、人々が出会い交流し学び憩う空間でもある。青年と民俗学の関係に限ってみても、日本青年館では講演会や研究会が開催され、全国各地から集まった郷土芸能が郷土舞踊と民謡の会において上演され、大日本聯合青年団郷土資料陳列所においては全国から集められた日本各地の郷土資料が展示されていた。昭和戦前期の東京の都市空間において、日本青年館はどのような場であったのかを知ることは、民俗学と青年の関係を当時の文化的・社会的背景の中に位置づけて理解していく上で非常に重要なポイントである。そこで日本青年館という空間が昭和戦前期の東京においてどのような意味をもっていたのかを見ていくことにしたい。

日本青年館の空間的特徴に強く作用しているのが、東京の他のどこでもなく、明治神宮外苑に隣接していることである。明治神宮の造営に全国の青年団が奉仕したことをきっかけとして建設されたのだから、歴史的経緯として当然なのだが、明治神宮外苑に隣接して存在したことがその空間的特徴において非常に重要な意味をもってくる。なぜならば明治神宮外苑は、それまでの東京になかった新しい空間だったからだ。

伝統的な神社とは異なる、近代に創建された神社としての明治神宮の新しさは、明治神宮がある内苑と、聖徳記念絵画館を中心にしてスポーツ施設などがある外苑の二つの空間によって構成されていることである。内苑は代々木御料地、外苑は青山旧練兵場跡を利用してつくられた。明治神宮に外苑が設けられたのは、1912（明治45）年の明治天皇の崩御に際し神社創建の他に各種の記念案が提出されたことが起因している。東京市長の阪谷芳郎とその義父である渋沢栄一を中心に天皇陵を東京に造営する運動が進められるが、政府は京都の桃山に場所を決める。そこで阪谷と渋沢はかわりに神宮を東京に造営する方針へと転換する。明治天皇と1914（大正3）年に崩御した昭憲皇太后を祭神として祀る明治神宮が1920（大正9）年に創建された。そして神社とは異なる記念物をおさめる空間として外苑がつけられた。明治神宮外苑は、記念のために記念宮殿・陳列館・林泉などを建設することが計画されたが、この計画は明治天皇を記念するために提出された他の案である美術館（沢柳政太郎）や博物館（黒板勝美）を受け入るものであった。また、明治神宮外苑は日本大博覧会の計画も引き継いでいる。日本大博覧会とは1907（明治40）年に第一次西園寺内閣で5年後の開催が計画され、次の第二次桂内閣で明治50年にあたる1917年に延期されるが、第二次西園寺内閣で1912（明治45）年に開催が中止された博覧会である。日本大博覧会は代々木御料地と青山旧練兵場跡を会場予定地とし、学芸館や美術館、工業館、動物館、水族館、園芸館、式場、奏楽堂の建設が予定され、開催後は公園に転用することも予定されていた〔山口 2005〕。

明治神宮外苑を設計したのは、明治神宮造営局外苑課の折下吉延である。折下は欧米の都市計画の実情を見聞しており、東京の新たな都市空間として明治神宮外苑をつくり出した。1926年に竣工した明治神宮外苑は明治天皇の一代を描いた絵画を陳列する聖徳記念絵画館が中心となって景観をつくり出し、陸上競技場、野球場、相撲場などのスポーツ施設が配されていた〔越澤 2001〕。

明治以来、首都東京の上演・展示空間となっていたのは上野公園である。江戸時代は徳川将軍家の墓所があった上野寛永寺は広大な敷地を有していたが、幕末の彰義隊の戦いで多くの建物が焼失した。明治になったのちに公園になると、1877（明治10）年に第1回内国勸業博覧会が開催された

ことを皮切りにたびたび博覧会の会場となる。さらには博物館や動物園がつくられていき、今日の東京国立博物館や上野動物園などの文化施設を有する空間になっていく。

上野公園は寛永寺という江戸時代の名残を引き継ぐ空間であった。それに対し、明治神宮外苑は江戸時代とは全く関係のない、新しくつくられた都市公園である。そこでは見通しの良い銀杏並木の街路が整備され、スポーツ施設では陸上競技や野球という近代のスポーツを人々が競い合い、観客が声援を送った。1924（大正13）年に竣工した陸上競技場は、さっそく同年に開催された内務省主催の第1回明治神宮競技大会に使用されている。1929（昭和4）年に出版された今和次郎編纂の『新版大東京案内』に「外苑に在る運動場は、市民の運動生活と、年中行事的な競技とで、今では独立した名所となつてゐる」[今編 2001 312]、「明治神宮の外苑も矢張り市民にとつての公園である。自動車のドライブに適するばかりではなく、若い男女の一对の近頃頓に増えたのは、この歩道がよく健康に適するからであろう」[同前 317]と評されている。明治神宮外苑は東京の新しいモダンな空間として誕生したのである。

日本青年館の設計には佐野利器の指導のもと、小林政一および木村栄二郎があたった。地上4階、地下1階であり、その外観は「近世式とし外苑の風致と調和を保つため簡素雄偉にして青年の質実剛健の精神を表現することを努む」ものだった。財団法人日本青年館の事務所であるとともに、イベント会場や地方から上京する青年のための宿泊施設として計画され、集会用に舞台を備えた大講堂（最大収容力約2000人）と中講堂（定員600人）、小講堂、宴席用の大食堂（定員350人）、洋風13室・和風22室の宿泊施設、宿泊食堂、会議室、図書室（60室）を有していた[熊谷 1942 189-191]。現代の日本では、地方都市にも文化ホールが存在するが、当時の日本においては一般に開放された舞台をもつ文化施設は、日比谷公会堂などに限られ非常に珍しいものだった。

このような日本青年館という施設があったからこそ、地方から青年が集まり、知識人が講演を行い、講堂の舞台で芸能を上演し、郷土資料を展示することによって、人と物が出会い交流することができたのである。当時、このような施設はきわめてめずらしいものだった。東京郊外の成城には柳田国男が自らの自宅の書斎を開放した喜談書屋があり、三田綱町には渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムがあったが、一般の人々に広く公開したわけではない。民俗を展示する国公立の博物館が設立されるのも、戦後のことである。

ただし、公共施設や学術施設ではなく、商業施設にまで広げるならば、地方の文物が集積し、一般の人々が目にして、買い求めることができる場が存在した。それは百貨店である。大正時代から昭和初期にかけて、大都市の百貨店では地方の伝統的な玩具が「郷土玩具」として販売され、あるいは地方の手工芸が「民藝」として販売されており、珍しく、またかえって「新しい」ものとして大きな人気を集めていた[加藤 2011][濱田 2016]。1930年代前半の『日本青年新聞』を見ると、百貨店における流行を意識してか、地方の玩具や工芸品を紹介するとともに、これらを副産品として生産して農家の現金収入増加につなげていこうとする記事が非常に多く掲載されている。

日本青年館は、震災後の東京に出現したモダン空間である明治神宮外苑に隣接して立地する、地方の農山漁村の郷土の文化に触れることができる新しい文化施設として存在していたのである。

## 出版メディアとその戦略

日本青年館は青年たちが地方から上京して集まる場であったが、普段の青年たちはそれぞれの地方で暮らしている。そこで東京という中央にある日本青年館・大日本聯合青年団という組織と地方の青年を結びつける役割をはたしたのが出版メディアである。

日本青年館と大日本聯合青年団は、全国各地の青年に知識や情報を届けるために、出版メディア

を積極的に活用した。戦前においてこのように出版メディアを駆使した社会組織は非常に珍しいものであり、日本青年館・大日本聯合青年団の大きな特徴である。

出版メディアの形態は、雑誌、新聞、青年カード、そして図書がある。それぞれについて概要を見ておくことにしよう。

まず月一回発行される定期刊行物の雑誌として『青年』がある。雑誌『青年』は、中央報徳会青年部が1916（大正5）年1月に機関誌として発行した雑誌『帝国青年』を引き継ぐ刊行物である。同年11月3日の皇太子（のちの昭和天皇）の立太子を記念して中央報徳会青年部は青年団中央部と名称を改めた。『帝国青年』は、1923（大正12）年1月発行の第8巻第1号から『青年』と改称する。『青年』は、青年団中央部から日本青年館、大日本聯合青年団へと発行所が変遷していく。雑誌『青年』は1926（大正15）年度から大日本聯合青年団の機関誌となる。

青年に関する中央機関においては長らく雑誌『青年』が機関誌だったが、1930（昭和5）年4月15日には『日本青年新聞』が創刊され、雑誌『青年』にかわって新たに機関紙となる。『日本青年新聞』の創刊により、『青年』はこれまでの無料配布から有料となり、読み物としての側面を強めていくようになる。『日本青年新聞』は当初月1回の発行だったが、1931（昭和6）年2月より、毎月1日と15日の2回の発行となる。大日本青年団を経て、1941（昭和16）年1月に大日本聯合女子青年団、大日本少年団連盟、帝国少年団協会と合併し、大日本青少年団となると、1941年2月15日発行の第250号から『日本青少年新聞』に改称した。太平洋戦争の戦局悪化のため用紙不足になると、出版物の統制により1944（昭和19）年4月15日発行の第326号を最後に廃刊する。

雑誌や新聞は今日でも存在する出版メディアだが、大日本聯合青年団が発行していたユニークな出版物に『青年カード』がある。カードというと、今日の我々はトランプや名刺などの小型の長方形の紙片を思い浮かべるかもしれないが、実際の形態は4つ折りのリーフレット形式の全部でも8ページしかない小冊子である。1929（昭和4）年発行の雑誌『青年』第14巻第8号に掲載された『青年カード』を紹介する文章では、「青年の教養に最も大切なる内容を極めて平易に且つ極めて興味深く解説したもの」であり、「此のカードが全部揃へられた暁には、謂はば青年ポケット百科全書または青年袖珍常識大学観を呈す」と解説している。カードの形態にしたのは、重い本のように億劫にならずに、気軽に取り上げ読んでもらうおうとする工夫であり、「文字も言葉も出来る丈け平易に、すらすらと面白く読めるやうに記述」してあった。毎月一冊発行され、文学や歴史、政治、経済、哲学、科学など、各カードごとに個別のテーマを扱い、約2年半をかけて全てを読むと「大体社会人としての必要な各方面の知徳」を修めることができるようになるものだった〔館史編纂委員会・編纂作業委員会編 1991 155-158〕。義務教育を終えただけの学歴の青年でも毎月読むことを通じて知識と教養を高めることができる、通信教育の趣きをもった出版物である。

『青年』や『日本青年新聞』、『青年カード』などの定期刊行物のほかに、日本青年館は一般むけの書籍を出版している。後述するように、柳田国男の『青年と学問』をはじめとする民俗学に関する書籍が出版されていた。また、日本青年館内には図書室も設けられ、図書や雑誌・新聞を読む場所が用意されていた。

1920年代に発足した日本青年館と大日本聯合青年団が出版メディアを積極的に活用したのは、すでに地方において、自分たちの知識と教養を高めるために読み書きする青年たちが多数存在していたからである。図書館・図書室などの読書施設をもっている青年団も少なくなかった。

日露戦争後、小学校の就学率が上昇することにもない、小学校卒業後の教育について対応することが課題となった。そこで文部省と内務省が着目し担い手として重要視したのが青年団である。1915（大正4）年に発せられた第1次訓令（「青年団体ノ教導発達ニ関スル件」）により修養団体とし

て位置づけられた青年団では、補修教育や夜学・講演会といった教育活動が行われた。そのような活動の一つとして青年団に図書館や文庫を設ける必要性が説かれていった。埼玉県の実例では、明治末期に県行政によって巡回文庫が導入される。これは書物のセットが一ヶ月程度で小学校を拠点にして町村間を移動していく文庫である。このことを契機として、青年団に文庫や図書館が常設されていった。1919（大正8）年の時点で、埼玉県では青年団の4割程度が文庫や図書館を保有し、青年団の7割程度が青年団外の蔵書施設を利用していた。青年団に図書館や文庫が定着していく大正期になると、巡回文庫は町村間を回るものから、町村内の家庭を回っていくものとなっていくのである〔新藤 2014〕。このように青年たちは、たとえ自分で書籍を買えなかったとしても、青年団の図書館や巡回文庫を読むことで読書欲を満たしていたのである。

青年が欲したのは読むことだけではない。青年たちは文章を書くことにも取り組み、『団報』を定期的に発行する青年団が全国各地に数多く存在した。戦前の日本青年館は全国各地の青年団の『団報』を収集している。今日の日本青年館には、全国の青年団が出版した膨大な数の『団報』が収蔵されており、多仁照廣によって目録も整備されている〔多仁編 2004〕。

ところで、実際のところ青年団の青年たちはどのようなものを読んでいたのだろうか。1930（昭和5）年度に実施された全国青年団基本調査では、青年団の読書傾向について調べている。雑誌の統計では、もっともよく読まれていたのが大日本雄弁会講談社の『キング』であり、7822 団と抜きん出ている。2位が同じく大日本雄弁会講談社の『雄弁』であり、『青年』は第3位の3169 団に甘んじている。意外にもというべきか、第8位に『中央公論』（1387 団）、第9位に『改造』（1202 団）が位置づけており、評論を掲載する総合雑誌も比較的読まれていたことがわかる（『日本青年新聞』第67号、1933年7月1日発行）。

『青年』は上位ではあるものの、当時の青年たちが最も好んで読んでいたのは大衆娯楽雑誌の『キング』だった。このような青年たちの読書傾向があったからこそ、大日本聯合青年団は出版メディアと読書を通じた教育に力を入れたと言えよう。大日本聯合青年団は1935（昭和10）年に青年の読書力をさらに高めるため文書教育運動を開始し、道府県郡市に文書教育指導委員を、町村には文書教育普及委員を設置している。

ところで、柳田国男が1928（昭和3）年に日本青年館から出版した『青年と学問』も、青年団運動のメディア戦略の観点から光を当てると、これまでとは違った輝き方をしてくるだろう。

『青年と学問』は1928年に日本青年館から出版された。ソフトカバーの手に取りやすい造本で、その金額は1円であった。柳田が、国際連盟委任統治委員としてジュネーブに滞在した際のヨーロッパ体験と、民俗学や民族学を吸収した上で、新たに構想する学問を世に問うた本である。その内容は、帰国した後に日本各地で行った下記の講演を一冊の本にまとめたものである。

- ・青年と学問（原題：楽観派の文化史学、長野県東筑摩郡教育会講演）
- ・旅行の進歩及び退歩（駒場学友会講演）
- ・旅行と歴史（原題：歴史は何の為に学ぶ、栃木中学校講演）
- ・島の話（東京高等師範学校地理学会講演）
- ・南島研究の現状（啓明会琉球講演会講演）
- ・地方学の新方法（社会教育指導者講習会講演）
- ・農民文芸と其遺物（神奈川県鎌倉郡青年会講演）
- ・郷土研究といふこと（原題：郷土研究の目的、長野県埴科郡教育会講演）
- ・Ethnology とは何か（交詢社文話会講演）

**青年団文庫**

昭和九年度の新事業として  
支部には必ず一文庫を備へよ！

青年団文庫は、日本青年聯合青年団に於て發行してゐるもの内、最も權威ある著書十三冊から出來てゐる。青年団を經營する上に絶対に缺く事の出来ない寶典である。

文庫の内容——

|           |              |    |
|-----------|--------------|----|
| 田澤義鋪著     | 青年団の使命       | 五〇 |
| 同         | 道の國日本の完成     | 三五 |
| 同         | 私を感激せしめた人々   | 五〇 |
| 同         | 政治教育小論       | 三五 |
| 熊谷辰治郎著    | 青年団の經營(農村之部) | 五〇 |
| 同         | 幹部の修養        | 二五 |
| 山本瀧之助著    | 青年団發達年表      | 九〇 |
| 柳田国男著     | 青年の奮闘記       | 一〇 |
| 大日本聯合青年団編 | 青年の一人一研究     | 三〇 |
| 同         | 産業界に輝く人々     | 三〇 |
| 同         | 一人一研究の展望     | 三〇 |
| 同         | 更生の若き先驅者     | 三五 |
| 以上計       | 形智館パンフレット六冊  | 五〇 |
|           |              | 二〇 |

美しいクロス張りの箱入れにすれば、そのまま運搬も出来ますし、また本箱として部屋の中に飾つても立派です。御希望の向きには、實銀五十錢でお掛けします。

冊九十全 圖五金價定

部理代館年青本日 所行發  
番八七七〇六京東替振

図1 青年団文庫の広告（『日本青年新聞』第86号、1934年4月15日発行）

- ・日本の民俗学（原題：民俗学の現状、日本社会学会講演）

『青年と学問』は、柳田国男が自らの学問を立ち上げていくにあたって、学問の意義を説いた書であり、民俗学のみならず、人文社会科学の他分野においても高く評価されてきた。ただし、書名に『青年と学問』とあるにもかかわらず、日本青年館という青年団の中央機関を出版元として、青年に向けて出版されたことは、これまでほとんど注目されてこなかった。ここでは青年向けの本という側面に焦点を合わせて論じてみることにしたい。

『青年と学問』は、日本青年館から青年修養叢書の3冊目として刊行された。ちなみに前2冊は、政治学者である川原次吉郎の『人生と政治』と、小説家である吉田絃二郎の『土と人と言葉』である。『青年と学問』は1931（昭和6）年に同じ判型で、『郷土研究十講』と書名を改めて出版された。価格は1割下げて90銭である。

青年団運動の観点から着目したいのは、『郷土研究十講』は、他の書物と合わせて1934（昭和9）年度に「青年団文庫」というセットとして販売されていることである。『日本青年新聞』第86号（1934年4月15日発行）に掲載されている広告（図1）を見ると、青年団文庫の他の書物は田澤義鋪『青年団の使命』『道の國日本の完成』『私を感激せしめた人々』『政治教育小論』、熊谷辰治郎の『青年団の經營（農村之部）』、山本瀧之助の『幹部の修養』、大日本聯合青年団編『青年団發達年表』『青年の奮闘記』『青年の一人一研究』『産業界に輝く人々』『一人一研究の展望』『更生の若き先驅者』である。文庫の構成は、田澤による青年団と青年のあり方についての理念、熊谷による青年団の經營方法、山本による青年団を導く幹部のあり方についての教え、そして青年団活動のモデルとなるような青年団や青年のあり方の紹介するものとなっている。このような青年団文庫の中に、柳田国男の『郷土研究十講』（『青年と学問』）は、青年団の青年たちが読むべき書物として加えられていたのである。

青年団文庫がユニークなのは、単にセットで販売されていただけでなく、持ち運び可能な入れ物も50銭で販売されていたことである。先の広告には「美しいクロス張りの箱入れにすれば、そのまま運搬も出来ますし、また本箱として部屋の中に飾つても立派です」とある。「そのまま運搬も出来」という形態は、21世紀に入った今日の読書環境からは、いったい何でこのような形態の文庫があったのか全く想像できないものであろう。しかし先述のように、農山漁村の青年たち

は青年団を拠点として読み書きに親しみ、巡回文庫が存在したことを踏まえるならば、持ち運びのできる青年団文庫の形態は、貸し借りする上で非常に便利なものだったことがわかる。

青年団の青年たちは、大学の高等教育はおろか、中学校にも進学できず、義務教育で終える者も多かった。青年たちが自らの知識と教養のために読み書きをする。そのことを可能にする能力を、重信幸彦は共同研究の成果発表のフォーラムにおいて「青年団リテラシー」と表現して指摘している。このような「青年団リテラシー」が、出版メディアによる地方の青年への民俗学の普及と、青年たちの民俗学研究を下支えしていたのである。

#### 4. 青年と民俗学——田沢義舗、柳田国男、地方の青年たち

日本青年館と大日本聯合青年団は、出会いと交流の空間である建物と出版メディアを通して、東京と地方の青年を結びつけ、各種の事業を展開していった。これらの事業の一つとして、民俗学に関する事業が展開された。

ではなぜ民俗学だったのだろうか。その理由を探るキーパーソンとなるのが、田沢義舗である。田沢は財団法人日本青年団創設以来の理事であり、1934（昭和9）年11月15日から1936（昭和11）年4月28日までのあいだ財団法人日本青年館の第5代理事長および大日本聯合青年団の第4代理事長をつとめた。1930（昭和5）年に日本青年館から出版した『青年団の使命』において次のように述べている。青年団の歴史を江戸時代の若連中などの若者団体が明治後期に青年団へと組み替えられていく過程をたどりながら、日本の青年団の本質を自然に発達した自治的団体であり、国家的に連合しつつも地方的特色を発揮する社会生活の団体であって、その社会生活の内容は社交娯楽と修養を目的とするとしている。また田沢は、青年団が団体組織として特定の政治運動や社会運動に関わることを強く戒め、中立であることを求めた。しかし青年団と政治は全く無関係だとしていたわけではない。生活を向上させ、腐敗した政党や選挙を改めていく、政治教育を行う団体としていた〔後藤編 1967 280-378〕。

このように青年団がそれぞれの地方の郷土生活を母体として生まれたと考える田沢が、郷土の向上と発展のために青年団の当然の任務としたのが、郷土研究であり郷土調査であった。1932（昭和7）年に新政社から出版した『政治教育小論』において次のように述べている。「青年団は公民教育というようなことを考えないでも、当然自分の郷土を研究しなければならぬ。われわれの郷土には歴史があり、伝説があり、特定の人物が各種の逸話を残し、特定の風俗習慣があり、特定の行事がある。そしてまた特定の産業がある。これらの事すべて青年団として力を入れなければならぬ」 「郷土調査の結果、自分の町村を各種の方面から分析研究するということになれば、そこに町村自治の振興に対する理解も熱情も湧然として起こってくるのであろう。これこそ最も着実なる公民教育の実際問題である」としている〔後藤編 1967 120〕。

田沢が郷土研究や郷土調査として呼んでいるものは、民俗学と重なり合う。このような田沢の思想は柳田国男と通じ合うものであった。柳田国男は『青年と学問』の中の「青年と学問」の章の冒頭で「公民教育の目的」という項目を立て、「学問のみが世を濟うを得べし」〔柳田 1976 13〕と宣言する。ここでの学問とは、上品な娯楽であるとか有閑階級の趣味とされるようなただ単に古いことを詮索するものではなく、「生活の現在と近い未来を学び知り」、「それを正しく説明しうる」ようになるための学問である〔同前 17〕。成人男性ならば誰でも投票できる普通選挙は実施されたものの、「今が今まででぜんぜん政治生活の圏外に立って、祈禱祈願に由るのはほか、よりよき支配を求める途を知らなかった人たちを、いよいよ選挙場へことごとく連れ出して、自由な投票をさせ

ようという時代に入ると、はじめて国民の盲動ということが非常に怖ろしいものになってくる」[同前]。だからこそ、相手の言葉を理解し自分でも腹藏なく話せるようなコミュニケーションが取れるようになり、何が適切な政策であり社会なのかを自分で判断できるようになるための学問、すなわち民俗学が重要だと論じる。日本青年館と大日本聯合青年団が民俗学に関する事業に取り組んだのは、理事および理事長をつとめた田沢の思想が背景にあったのであり、田沢がバックアップしてくれたからこそ実現が可能だったのである。

1925（大正14）年に日本青年館の開館式において郷土舞踊と民謡の会を開催しているように、日本青年館はその設立当初から郷土の文化を取り入れていたが、積極的に展開するようになるのは、1931（昭和6）年からである。この年の4月から「郷土週間」を開催し、東京において地方の郷土の芸能や文物を上演・展示し、そして地方から青年たちが上京するイベントを催す。1926（大正15）年4月13日に皇太子（のちの昭和天皇）が日本青年館に行啓した4月13日を記念して、その前後に大日本聯合青年団第7回大会、第6回郷土舞踊と民謡の会、第4回青年創作副業品展覧会、第1回一人一研究資料展覧会などの行事が行われた。翌年は前年9月の満州事変の勃発の影響か郷土週間と名乗ることはなかったが、1933（昭和8）年にはふたたび「郷土週間」と名乗って開催された。その後は「郷土週間」と名乗ることはなかったが、地方の青年が上京し、青年の創作・研究による文物が展示される一連の行事が同時に開催されるようになる。

「郷土週間」が初めて開催された翌年の1932（昭和7）年10月に行われた大日本聯合青年団第8回大会では、青年団員に対する政治教育の普及徹底を図る方策として、青年団で共同連帯の生活を体験して公民精神の基礎を涵養することとともに、「公的生活ノ基本タル郷土の認識ヲ正シウシ郷土生活ノ理想ヲ実現セムガ為ニ社会経済的其他各方面ヨリスル郷土ノ調査研究ヲ奨励スルコト」が議決されている[熊谷 1942 附録 122-123]。

1933（昭和8）年7月には農村恐慌や経済に行き詰まりに対し、郷土生活を調査研究し再認識することにより更生することを企図して第1回郷土新興講習会が日本青年館にて開催される。この会では柳田国男が「郷土調査と民俗」の講師として、田沢義鋪や蠟山政道、安岡正篤、小田内通敏らとともに名を連ねている（『日本青年新聞』第65号、1933年6月1日発行）。同年には「郷土調査研究項目」の懸賞募集を行っている。「郷土の振興計画には、先づ郷土の研究、調査を出発点としなければならぬ」「郷土を正しく認識しようとするれば、言までもなく社会、経済、地理、民俗等の立場より研究調査を進めて往かねばならない」という理念のもと、調査研究方法を募集するものだった（『日本青年新聞』第69号、1933年8月1日発行）。全国の青年から集まってきた調査研究方法は柳田国男と小田内通敏によって審査され、翌年に日本青年館から出版された『郷土を如何に研究すべきか』に掲載された。

1934（昭和9）年11月2日には、大日本聯合青年団創立十周年記念事業として設立が計画された郷土資料陳列所が開所した。開所に先立ち、大日本聯合青年団が『日本青年新聞』などを通じて全国の青年に資料の寄贈を依頼すると、全国から続々と資料が送られてきた。資料を送った人物の一人として進藤松司がいる。進藤は、1910（明治43）年に小学校の尋常科を卒業したのち、高等科に進むことを希望し、校長と先生も父親を説得しようとしたが、父親が家庭の事情から許さず、やむなく漁師になる。夜は先生のところで学んで船の中で勉強し、沖漁の合間にも勉強をした。研究熱心な性格で、兵庫県まで行って新式の烏賊漁法を学んでは成果を上げ、冬期間の杜氏の仕事では郡の清酒品評会で入賞するまでになる[渋沢 1992 256-258]。進藤は大日本聯合青年団郷土資料陳列所の求めに応じて、自分が収集した10数種の漁具の標本とその解説を寄贈している。寄贈の動機を「地方には地方に依り独特の漁業用具あり、漁具の改良は漁村更生の原動力ではあるまいか。

漁具の改良は、地方漁具を収集して参考資料となし、一意専心研究してこそ、その目的は達せられる」と語っている（『日本青年新聞』第99号、1934年11月1日発行）。語られる動機には向学心と、漁村の更生のためには、知識や資料を個人で独占するのではなく広く提供しなければならないとする信念が感じられる。進藤はのちに、漁師と杜氏のかたわらに漁業の民俗の研究を進めていき、洪沢敬三が主催するアチック・ミュージアムから『安芸三津漁民手記』を1937（昭和12）年に出版している。

大日本聯合青年団郷土資料陳列所は館内の3室を用いただけの展示だったが、将来的には独立した博物館を設立することも構想されていた。1935（昭和10）年5月に開催された大日本聯合青年団第11回大会では、「日本民族ノ民族史的発展経路ノ研究ニ努ムルコト 之ガタメニ地方青年団ニアツテハ郷土史的研究ニツトメ郷土社会ノ文献、什器、慣習信仰等ノ調査蒐集ヲ行ヒ郷土博物館ノ建設ヲ期スルコト、大日本聯合青年団ニ於テモ全国青年団員ノ総努力ニヨリ日本民族博物館ヲ建設シ之ヲ世界ニ紹介スルコト」が決議されている〔熊谷 1942 附録 136-137〕。もしこれが実現していれば、明治神宮外苑の聖徳記念絵画館やスポーツ施設に隣接して、農山漁村の郷土資料を収蔵・展示する博物館が存在したことになる。そして地方においては各地に郷土博物館が誕生していたのかもしれないのである。

以上のように田沢義鋪や柳田国男の思想、そして日本青年館と大日本聯合青年団が行なった事業、それらに対する青年たちの受容の過程を見ていくと、青年にとっての民俗学とは、社会を考え政治を判断し、自分が住んでいる地域の生活を更生し娯楽を充実していく役割が大きく期待された学問であったことがわかる。共同研究では取り上げなかったが、今和次郎たちが大日本聯合青年団郷土資料陳列所で作った民家展示は、単に伝統的な民家の姿をそのまま見せるだけではなく、住宅改善を促す画期的なコンセプトのもとで製作されていた〔丸山 2013〕。青年たちが学ぶことを期待された民俗学とは、目の前の実際の社会生活に向き合う実践的な学問だったのである。

日本青年館と大日本聯合青年団は、各種の民俗学に関する事業を熱心に展開していたが、しかしながら1937（昭和12）年の盧溝橋事件をきっかけとして日中戦争が勃発し、社会状況が変容する中で急速に途絶えてしまう。郷土舞踊と民謡の会は、1936（昭和11）年を最後に中止となり、大日本聯合青年団郷土資料陳列所も1937（昭和12）年秋に突如閉鎖される。出版物も、1937年5月に発行された『山袴の話』が最後となる。田沢義鋪はすでに1936年4月に理事長を辞任していた。田沢は『日本青年新聞』第135号（1936年5月1日発行）に寄せた「理事長の職を辞して」という挨拶文において、「青年団は天下の公器」であり「国家と共に永遠の声明を持つてゐる」のだから、「一人が、長くその枢要の地位にあつて事に当るのは、その人自身が真に理想的の人物でない限り、或は不知不識の間に一つの傾向に偏したり、或は一つの態度に固定したりして、その進運を全うすることの出来ない」と辞任の理由を説明している。ただしこれは表向きの理由であり、実際には二・二六事件後に軍部の力が増大していくことに対し否定的な態度を取るために、青年団に迷惑がかからないように自由な立場を選んだとも言われている〔下村 1992 186-187〕。

日本青年館と大日本聯合青年団も、青年を国家のために動員していく組織へと大きく変わっていく。青年団運動の指針であった「青年団綱領」も廃され、1938（昭和13年）9月に新たに「大日本聯合青年団綱領」が定められる。

一、我等ハ大日本青年ナリ

肇國ノ皇謨ニ則リテ忠孝ノ精華ヲ發揮シ 同心團結以テ国運ノ進展ヲ期ス

一、我等ハ大日本青年ナリ

養正大和ノ精神ヲ一貫シテ 隣保協同厚生ノ実ヲ挙ケ 共励切磋道義世界ノ建設ヲ期ス

一、我等ハ大日本青年ナリ

心身ヲ鍛練シテ進取明達力ヲ研究創造ニ効シ 勤勞奉公各自職分ノ遂行ヲ期ス〔熊谷 附録  
165〕

新たな「大日本聯合青年団綱領」では、「青年団綱領」と同じように「我等ハ」から始まっているものの、「大日本青年ナリ」という国家の下の存在へと青年の位置づけが変わっている。その意図は、「世界に比類なき神州健児たることを居常深く意識し、青年の一切の行動は悉くこの自覚を根底として顕現しなければならぬとする心構へを強調」〔熊谷 255〕するためだった。その上で青年は、天皇を中心とする国家のために「忠孝ノ精神ヲ發揮」して、「国運ノ進展」のために「大和ノ精神」を一貫して持ちながら協力して「道義世界ノ建設」を誓い、「各自職分ノ遂行」するための存在と規定される。青年は国家のための一個の歯車と位置づけられるのである。さらに大日本聯合青年団は規約を改め、1939（昭和14）年4月1日をもって大日本青年団となる。単に組織名が変わっただけでなく、組織の目的そのものが変わった。それまでは全国各地の青年団の「連絡提携」のために共同での発達を図っていたが、大日本青年団は1938（昭和13年）に定められた「大日本聯合青年団綱領」に則り、全国各地の青年団の「統制指導」を図っていくようになる〔熊谷 229〕。それぞれ青年団が地方的特色を發揮しながら発達していくことを目指した田沢義鋪の理念からかけ離れた組織へと変貌していくのである。

日本青年館および大日本聯合青年団が民俗学に関する事業に取り組んだのは、1925（大正14）年に開催された郷土舞踊と民謡の会から数えても10年余りのことでしかない。郷土の調査研究に本格的に取り組み始めた1933（昭和8）年から数えるならばわずか5年ほどに過ぎない。満州事変から日中戦争までの自由と自治が比較的認められた時代だったからこそ可能だったとも言えるだろう。この短期間のあいだに、どのような取り組みが行われ、何が成し遂げられたのか。そして、それらは今日から見て、どのような意義があったのか。本書はこれらの課題について、論考と資料によって答えようとするものである。

## 5. 研究成果と課題

本書では共同研究の成果を、論考篇と資料篇の二部に分けて構成している。論考篇では、共同研究員が、2年間の研究成果を踏まえた論文を寄せている

資料篇では5つの章に分けて、資料を紹介している。「日本青年館・大日本聯合青年団民俗学関連刊行物」は、日本青年館および大日本聯合青年団が作成・発行した民俗学に関する刊行物の一覧である。作成にあたっては、できる限り書影も掲載することを試みた。活字製本されたものから謄写版の報告書まであり、形態は様々である。編集と解題は丸山泰明が担当した。

『『日本青年新聞』民俗学関連記事目録』は、『日本青年新聞』（1941年2月15日発行の第250号から『日本青少年新聞』に改称）に掲載された民俗学に関する記事を整理したものである。この目録により、青年をめぐる民俗学の動向を時代順にたどることが可能となる。編集と解説は丸山が担当した。

「大日本聯合青年団郷土資料陳列所資料目録」では、大日本聯合青年団郷土資料陳列所が所蔵していた郷土資料の目録である。この目録は『日本青年新聞』や大日本聯合青年団郷土資料陳列所の『月報』『季報』の記事から作成したものである。全体に比べて、その一部でしかないが、この目録

により、全国各地からどのような人々が関わりながら、どのようなものが郷土資料として集積されていったのかが見えてくるはずである。編集と解説は木村裕樹が担当した。

「第8回「郷土舞踊と民謡の会」写真」は、今回の調査において発見された1934（昭和9）年に開催された第8回郷土舞踊と民謡の会の際に、舞台上演している様子を撮影した写真である。郷土舞踊と民謡の会については、当時の資料から、記録のために写真や映画が撮影されていたことがわかっていたが、書籍などに掲載された写真をのぞいて今日現存は確認されていない。本資料は、各地で行われていた郷土芸能が土地から切り離されて日本青年館で上演されるようになったことによってどのように舞台化されていたのかを視覚的に知るができる数少ない資料となる。編集と解説は黛友明が担当した。

「日本常民文化研究所所蔵 大西伍一旧蔵写真資料」は、日本青年館にて嘱託として勤務していた大西伍一が所蔵していた写真である。大西は柳田国男や渋沢敬三とも深く交流するとともに、地方の青年とも積極的に交流した人物であり、日本青年館・大日本聯合青年団の民俗学に関する事業を検討する上でキーパーソンとなる人物である。ご遺族によって神奈川大学日本常民文化研究所に寄贈された写真を掲載している。編集と解説は小林光一郎が担当した。

なお、本論の末尾には、共同研究の概要に関する参考資料として、共同研究員、応募時の書類に記載した共同研究の目的と期待される成果、2年間の期間における調査と研究会、そして研究成果発表会として2019（令和元）年7月6日に開催した共同研究フォーラムについての情報をまとめた。

2年間の共同研究により、一定の成果をあげることができたが、その一方で残された課題、新たに生じてきた課題も多い。ここではその中で代表的なものを3点あげることにする。

第1は、青年と「芸術」の関係についてである。郷土舞踊と民謡の会という「郷土芸能」と、大日本聯合青年団郷土資料陳列所や青年創作品展覧会における「郷土工芸」の取り組みがあった。両者を青年と「芸術」という枠組みで捉え、同時代の各種の芸術運動と比較することにより、青年たちが関わりつくり出そうとした文化の新たな様相、それらが都市の住民に消費されていく様相の特質が見えてくるのではないだろうか。柳宗悦や民藝運動や山本鼎の農民美術運動、藤井達吉の工芸論、権田保之助の民衆娯楽論などを視野に入れながら、映画やレコード、ラジオなどの複製技術が社会に浸透していく中で、郷土の文化がいかんして「芸術」として見出され展開していったのか明らかにすることは、昭和戦前期の文化研究に新たな視角と課題を与えるものになるだろう。

第2は、植民地の青年団の関わりである。大日本聯合青年団は当初、道府県の聯合青年団の連合体として発足したが、後に植民地の青年団も加入するようになる。1928（昭和3）年には樺太青年団が加盟し〔熊谷 232-233〕、1938（昭和13）年には台湾聯合青年団および朝鮮聯合青年団が正式に加盟している〔同前 256〕。これは組織としての正式な加盟であるが、正式な加盟以前にも、植民地の青年・青年団とのつながりは存在した。例えば1934（昭和9）年の第8回の郷土舞踊と民謡の会では、朝鮮の豊年踊が上演されている。植民地の青年団の関わりをより深く調べることによって、戦後引かれた今日の国境線を前提としないより広いアジアのスケールから日本青年館や大日本聯合青年団を捉えることができるようになるだろう。

第3は、民俗学が個々の青年に与えた影響を、より具体的に明らかにすることである。当初の計画では、青年たちにとって民俗学とはどのような役割をはたしたのかを明らかにすることを目的としていたが、2年間の共同研究という時間的制約もあり、青年たちの具体的な人物像を十分に明らかにできなかった。もちろん全くわからなかったのではないが、しかし全体としては当初計画していたほどには達成度が及ばなかったことを率直に認めなければならない。

これらのうち特に第3の点について、民俗学に取り組んだ青年の一例として山田次三を紹介し

て、今後のさらなる研究への参考にすることとしたい。山田は1911（明治44）年9月27日に広島県比婆郡峰田村（現在の庄原市）生まれ、小学校を卒業したのち私立の格致学院に進学するが、第一学年を未修のまま上京し、東京商工学院工業化学科の夜学で学ぶ。1931（昭和6）年に修了すると故郷に戻り、青年団活動に従事しながら、大西伍一の知遇を得て、植物学や自然誌の研究に取り組み、やがて民俗学の研究に進んでいった〔山田 1979 441〕。

1935（昭和10）年に日本青年館で開催された柳田国男還暦記念日本民俗学講習会にも参加している。これまでの研究では、日本民俗学講習会の参加者として民俗学の研究者や地方の郷土研究家の他に、小学校の教員が参加していたことが言及されてきたが〔小国 2001〕、山田のような青年もまた存在した。このとき宿泊先でたまたま同室となったのが、のちに著名な民俗学者となる宮本常一である。宮本は当時、大阪の小学校で教員をしていた。宮本は山田について「細面の襟裾は刈りあげ、頭頂は髪を伸ばしていて誠実そのもの、土から生えたような人であった」とその風貌と印象を記している。帰郷する際には宮本常一の勧めで大阪に立ち寄って、近畿の民俗学界の中心的人物であった澤田四郎作の家に一泊し、植物方言のことで話がはずんだという〔宮本 1979 1-4〕。日本民俗学講習会の際には、各府県の民俗学の状況を話し合う座談会でも発言している。柳田国男が「次に広島県では比婆郡の山田次三君をご紹介します。山田君は以前は動植物の方を熱心にやつて居りました。近頃になつてもつと早く消えるものがあるからといふ気持ちが始つて民俗の方を極く最近に始められたのだそうであります」と紹介している。これを受けて山田は「私は青年団の正会員で農業をやっていますので、斯ういふ方面の研究をして居られる方がありまして一向存じません。〔中略〕これから民俗方面のことをやって見ようかと思つて出て来た訳であります」と答えている。〔柳田編 1935 435〕。大日本聯合青年団郷土資料陳列所が草木染について調査した際には、全国からの報告の中にあつた方言によって表記された植物の和名を探索する作業を行っている〔大日本聯合青年団郷土資料陳列所編 1935〕。山田が取り組んだ植物学と民俗学のそれぞれの知識を組み合わせた活動である。

山田は広島民俗同好会の会員になるとともに、民間伝承の会に参加して民俗の調査に従事し、雑誌『民間伝承』に郷里の広島県の事例を報告している。地元ではガリ版刷りの『郷土調査』を発行した。精力的に民俗学に取り組むものの、戦果の拡大とともに筆を折る。1945（昭和20）年の春、召集令状が届く。戦場に赴くにあたつてしたためた遺書には「植物学・日本民俗学の二つは自ら趣味というよりも心の糧たりしなり 暇々に記述せるものは拙くとも 我が生涯を記念すべきものの一つなり 散逸せしめず しかも我が理想を具現せんと努力する人に大に利用せられんことを望むもの切なり」と記している。元来病弱であつた上に過酷な軍隊生活により、終戦直後の1945年9月14日に福岡陸軍病院で34歳の生涯を閉じた〔山田 1979 439-442〕。

日本青年館および大日本聯合青年団が民俗学に関する事業を展開したのは、長く見積もつてもわずか10年あまりの期間にしか過ぎなかつた。さらには、1937（昭和12）年からの日中戦争、さらには1941（昭和16）年からの太平洋戦争により、学問をすることが許されなくなつていく中で、せっかく生まれ始めていた芽が、山田次三のように戦争により摘み取られてしまったことも考えられる。昭和戦前期の青年たちに民俗学はいかなる影響を与え、どのような意味をもつたのかは、いまだ十分に解き明かされていない問いである。

21世紀の今日、青年団は、祭りを担う若者の集団として、あるいは地域の消防や防災を担う集団として存続している地域もないわけではない。しかし、戦前とは比べ物にならないほど衰退してしまつている。だが、世の中から青年がいなくなつたわけではない。そして民俗学と青年の結びつきも消えたわけではない。現代の日本では、青年団ではなく、大学という場において青年たちが民

俗学を学んでいる。昭和戦前期の青年にとって民俗学はどのような意味をもっていたのかという問いは、単なる過去の事績の探究に終わるわけではない。我々が生きる同時代にもつながっていく問いかけなのである。

## 参考文献

- 岩田重則 1996『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』未来社
- 掛谷昇治 1996「日本青年館と柳田国男」柳田国男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書房
- 加藤幸治 2011『郷土玩具の新解釈—無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』社会評論社
- 館史編纂委員会・編纂作業委員会編 1991『財団法人日本青年館七十年史』日本青年館
- 熊谷辰治郎 1942『大日本青年団史』（非売品）
- 後藤文夫編 1967『田沢義鋪選集』田沢義鋪記念会
- 小国喜弘 2001『民俗学運動と学校教育—民俗の発見とその国民化』東京大学出版会
- 越澤明 2001『東京都市計画物語』ちくま学芸文庫
- 今和次郎編 2001『新版大東京案内 上』ちくま学芸文庫
- 笹原亮二 2019「芸能を巡るもうひとつの『近代』—郷土舞踊と民謡の会の時代」『芸能史研究』第119号
- 渋沢敬三 1992「『安芸三津漁民手記』序」『渋沢敬三著作集 第3巻』平凡社
- 下村湖人 1992『この人をみよ』田沢義鋪顕彰会
- 新藤雄介 2014「大正期における文庫の偏在—蔵書の多様化する形態と施設」『マス・コミュニケーション研究』No.85
- 大日本聯合青年団郷土資料陳列所編 1935『郷土染色に関する調査—中間報告』大日本聯合青年団郷土資料陳列所
- 多仁照廣 1989「“幻の郷土博物館” 郷土資料陳列所」日本青年館青年情報資料センター編『日本青年館史編纂ニュース』第3号
- 多仁照廣編 2004『地方青年団報と地域青少年教育の歴史研究』（平成14年度～平成16年度科学研究費補助金 基盤研究（B）（1））
- 中野泰 2005『近代日本の青年宿—年齢と競争原理の民俗』吉川弘文館
- 濱田琢司 2016「工芸品消費の文化的諸相と百貨店—民芸運動とその周辺から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第197集
- 平山和彦 1988『青年集団史研究序説〔合本〕』新泉社
- 丸山泰明 2013『渋沢敬三と今和次郎—博物館的想像力の近代』青弓社
- 宮本常一 1979「民俗学草創期と山田次三氏の業績」山田次三『奥備後の民俗 山田次三遺稿集』山田次三遺稿集刊行会
- 森本いずみ 1996「第日本聯合青年団郷土資料陳列所の設立」博物館史研究会編『博物館研究』第3号
- 柳田国男 1976『青年と学問』岩波文庫
- 柳田国男編 1935『日本民俗学研究』岩波書店
- 山口輝臣 2005『明治神宮の出現』吉川弘文館
- 山田次三 1979『奥備後の民俗 山田次三遺稿集』山田次三遺稿集刊行会

## 【参考資料】 共同研究の概要と経過

### 1. 共同研究名

国際常民文化研究機構共同研究（奨励）

昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究

### 2. 共同研究員

丸山泰明（代表、天理大学、民俗学）

小熊誠（神奈川大学、民俗学）

木村裕樹（立命館大学、民俗学・民具研究）

小林光一郎（神奈川大学日本常民文化研究所、日本民俗学）

黛友明（市川市文化スポーツ部文化振興課、日本民俗学・民俗芸能研究）

室井康成（民俗学・東アジア近現代史）

### 3. 研究目的と期待される成果

本研究は、昭和戦前期の農山漁村の青年層において民俗学がどのように受容され、郷土の生活・生業の改善に活用されたのかについて明らかにしようとするものである。具体的には、青年団の中央組織である日本青年館および大日本聯合青年団の事業に焦点をあわせ、事業にかかわった地方の青年および知識人の取り組みについて考察する。

特に、次の三つの事業に着目することにした。第1は、民俗学関連の出版事業である。柳田国男の『青年と学問』（1928年）が代表的な例だが、日本青年館および大日本聯合青年団は民俗学に関連する出版物を発行している。また、地方の青年団も会誌を発行し、自分たちの活動を報告していた。これらのメディアを分析することによって、当時の知識人が民俗学に期待した役割と、地方の青年の実際の取り組みを明らかにすることができる。

第2は、郷土舞踊と民謡の会のイベントである。従来の研究では折口信夫や小寺融吉といった知識人によるこのイベントに対する言説が主に検討の対象となってきた。本研究では、むしろ青年に焦点を合わせて、地方の青年たちにとってのイベントの意味を検討する。また、竹内芳太郎が詳細に記録したノート（工学院大学図書館所蔵）を分析することを通じて、上演・演出の実態を解明する。

第3は、大日本聯合青年団郷土資料陳列所の活動についてである。このミュージアムは、その資料のほとんどが、当時まだ無名だった吉田三郎や進藤松司をはじめとする地方の青年から寄贈されたものであり、生活・生業のために用いたり、研究・改良したりしたものだった。当時の資料の一部は国立民族学博物館に引き継がれているが、いまだ不十分な調査しかなされていない。資料の種類と、収集・寄贈の過程を検証することを通じて、当時の生活・生業とその改善のころもと、研究者と地方の青年のネットワークを跡づける。

調査の成果をまとめた報告書には、論考の他に、「民俗学関連出版物・新聞雑誌記事目録」「竹内芳太郎『郷土舞踊と民謡の会』記録ノート資料集」「大日本連合青年団郷土資料陳列所旧蔵資料目録」を掲載する。これらの作業により、昭和戦前期において民俗学が、単なる学問にとどまらず、青年が主体となって地方の生活・生業を改善しようとする実践であったことが浮き彫りになると期待できる。そしてまた本研究は、民俗学史にとどまらず、地方の農山漁村の青年たちを主人公とする社会史・文化史・生活史を描き出すものでもある。1920年代の大正デモクラシーから1930年代後期の総力戦体制へと移り変わりゆく社会を考察する上で意義のある研究報告・資料集となるであ

ろう（以上、応募書類より）。

#### 4. 調査および研究会

〈調査〉

2017年度

8月22～23日 日本青年館（丸山、小熊、木村、小林、黛、室井）

9月11～12日 東京都立中央図書館、工学院大学図書館（丸山、黛）

12月15～17日 雫石町立図書館・雫石歴史民俗資料館（丸山、木村、小林）

3月8～9日 東京都市大学図書館（丸山、小林、黛、室井）

3月18～19日 埼玉県本庄市、金屋村青年団についての調査（丸山）

2018年度

6月3日 渋沢史料館（丸山、小熊、黛）

6月4日 日本青年館（丸山、小林）

8月21～23日 日本青年館（丸山、木村、小林、黛、室井）

11月1～2日 国立国会図書館、日本青年館（丸山）

1月7～8日 日本青年館（黛、丸山）

2月12～13日 国立国会図書館、日本青年館（丸山）

2月18～20日 雪の里情報館（丸山、木村）

3月7～8日 日本青年館（丸山、木村、室井）

〈研究会〉

2017年度

6月3～4日 神奈川大学 第1回研究会（丸山、小熊、木村、小林、黛、室井）

・研究発表

丸山泰明「共同研究の射程—日本青年館というトポスと民俗学の形成」

小林光一郎「アチック・ミュージアムと大西伍一」

10月28～29日 神奈川大学 第2回研究会（丸山、木村、小林、黛、室井）

・研究発表

黛友明「記録された『郷土舞踊と民謡の会』—竹内芳太郎ノートを中心に」

丸山泰明「『郷土』はいかに認識・集積されたのか—大日本聯合青年団郷土資料陳列所における資料収集のプロセスと寄贈品の分析から」

2018年度

4月21～22日 神奈川大学 第1回研究会（丸山、小熊、木村、小林、黛、室井）

・調査成果の報告

・2018年度のスケジュールの打ち合わせ

・日本常民文化研究所所蔵・『山袴に関する調査資料』（大日本聯合青年団）の調査

9月29日 神奈川大学 第2回研究会（丸山、小熊、小林、室井）

・研究発表

室井康成「選挙粛正運動と青年団—司馬遼太郎の“若衆”観からの問い」

1月26～27日 神奈川大学 第3回研究会（丸山、小熊、木村、小林、黛、室井）

・研究発表

黛友明「郷土舞踊と民謡の会における運営と演出」

木村裕樹「副業生産と村落—郷土資料陳列所がめざしたもの」

・今後の調査計画および報告書の内容・構成についての打ち合わせ

3月9日 神奈川大学 第4回研究会

・2年間にわたる共同研究の総括

・次年度のフォーラム開催および報告書刊行についての打ち合わせ

## 5. フォーラム

国際常民文化研究機構共同研究（奨励）成果発表会

「青年と学問」の時代—昭和戦前期の郷土と民俗学

開催日：2019年7月6日

会場：神奈川大学3号館405講義室

### 開催趣旨

青年に対し、学問は何ができるのだろうか。

柳田国男が1928年に上梓した『青年と学問』の出版元であり、柳田の還暦記念として1935年に日本民俗学講習会が開催された日本青年館は民俗学の拠点だった。東京・明治神宮外苑の地を拠点として全国の青年団を結びつけた日本青年館は、郷土の更生をその土地に生きる青年に期待した。青年を主体とし、教育・工芸・芸能を通じて郷土の発展を促そうとする取り組みに、柳田国男や渋谷敬三・今和次郎といった民俗学者も関わっていく。しかし、1937年に日中戦争が勃発し社会情勢が大きく変化する中で、急速に途絶えてしまった。

普通選挙実施により政治と言論が大衆化し、地方の農山漁村の文化・生活が着目され、レコードやラジオなどの新たなメディアが浸透した昭和戦前期において、郷土と青年に民俗学という学問はどのように関わったのか。地方創生に若者の活躍が期待され、大学に地域系の学部がひしめく時代に問い返す。

### プログラム

丸山泰明「問題提起」

小熊誠「日本青年館と地方青年団—宮城県気仙沼大島の青年団資料による」

室井康成「選挙粛正運動と青年団—司馬遼太郎の“若衆”観からの問い」

小林光一郎「アチック・ミュージアムと大日本聯合青年団の関連性—アチック同人大西伍一を事例に」

木村裕樹「青年による副業の研究—郷土工芸を中心に」

黛友明「青年は『郷土』を踊れたか—『郷土舞踊と民謡の会』の理念と現実」

コメント 重信幸彦